

モデルカリキュラム「幼児と表現」に向けた「歌う」という視点

久光明美*1

(*1 宇部フロンティア大学短期大学部保育学科)

Viewpoint of “Singing” for “Infants and Expression” in the Model Curriculum

Akemi Hisamitsu*1

(*1 Department of Nursery Education, Ube Frontier College)

平成 29 年度教育職員免許法施行規則の改正により、「教科に関する科目」、現「子どもの音楽」が「領域に関する専門的事項」「幼児と表現」へと変更されることを受け、本学で開講している現行の「保育指導法（表現Ⅰ）」の授業内容について、幼稚園教育要領を再考しながら、「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラムの趣旨に沿って振り返り、令和 4 年度、新たに開講される予定の「幼児と表現」に向けた授業内容の課題を探ることを目的とする。また、歌いながらピアノを弾く、歌いながら手遊びをするなど、歌いながら何かをすることが基本となる音楽表現においての、「歌う」ということに着目し、授業内容の課題に含有させたい。

キーワード：幼稚園教育要領、表現、歌う、保育内容、モデルカリキュラム

Key word: course of study for kindergarten, expression, singing, childcare content, model curriculum

1. はじめに

幼稚園教育領域には、幼児の発達の側面から5つの領域が示されている。これらの5つの領域の各要素を複合的に育てていくことで、子どもたちの自主性や主体性、社会性を育てながら、言語能力、社会的能力を伸ばす構造になっている¹⁾。その中の一つに幼児の音楽表現活動に関わる感性と表現に関する領域「表現」がある。その定義は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と記されている²⁾。領域の「ねらい」は子どもの自主性や主体性を育てる際に目指すべき方向性が「心情、意欲、態度」などを含めた資質・能力の観点で示されている³⁾。領域「表現」における「ねらい」は(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ⁴⁾である。

この3つの「ねらい」を達成するための具体的な事柄が8項目の「内容」で示されている。

そして、3つの「内容の取扱い」は「内容」に向き合う際の保育者の心構えである⁵⁾。この「内容の取扱い」

(1) に「その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」、(3) に「様々な素材や表現の仕方に親しんだり、⁶⁾と今回の改訂（平成29年）で追記された。生活の中で出会うものや、表現活動で用いる道具などの大切さと、それらへの気づきや心動かされる体験の大切さが示されている⁷⁾。

これらの幼稚園教育要領に示された領域「表現」における保育内容を俯瞰し、現行の「保育指導法（表現Ⅰ）」の授業内容を、「領域に関する専門的事項」の科目「幼児と表現」との接続への方向性を明らかにしていきたい。

2. 領域「表現」の音楽表現における「歌う」という視点

幼児教育における「歌う」という歌唱活動は、「幼稚園教育要領」の領域「表現」の「内容」(6)に「ねらい」を達成するために指導する事項として、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。」²⁾と明記されている。

本学の保育者養成課程で学ぶ学生の音楽表現活動は、手遊び、わらべうた遊びなど多岐にわたるが、実習に繋げるために弾き歌いを中心に行われているのが現状である。弾き歌いをするにあたっての学生のピアノと歌唱の意識を比べると、ピアノへの意識はるかに高い。また、現行の「保育指導法(表現I)」での模擬演習を行った際の、学生の「歌うこと」への意識の事例を挙げ、領域「表現」の音楽表現における「歌う」という視点にも注目する。

3. 現状と課題

3.1.保育指導法(表現I)

3.1.1 現状

令和元年度のシラバスに示した保育指導法(表現I)の到達目標及びテーマと授業概要は以下のとおりである。

保育指導法(表現I)の到達目標及びテーマ

1. 「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」において示されている保育内容(健康・人間関係・環境・表現・言葉)について総合的に関連させながら理解することができる。
2. 領域「表現」のねらい及び内容を踏まえ、乳幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点を理解することができる。
3. 指導案の構造を理解し、子どもの発達に沿った具体的な保育を想定した指導案を作成、実践し、その振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けることができる。
4. 領域「表現」に関わる乳幼児が経験し身に付けて行く内容の関連性及び小学校の教科等とのつながりを理解することができる。

授業の概要

子どもの発達に沿った豊かな感性や自己表現力・創造性を育てるための音・音楽環境のあり方や音楽表現活動の内容について学び、「聴く」「歌う」「動く」「奏でる」「つくる」の視点から子どもの総合的音楽表現活動の構造化と実践・展開ができるようになることを目的とする。同時に、保育者としての豊かな感性や表現

力、創造性も身に付けていく。また、表現における情報機器及び教材の活用法について事例を通して学び、実際に体験することを通して、保育構想に活用できるアイデアを考えていく。

3.1.2 課題

本保育指導法(表現I)内容とモデルカリキュラムに示された到達目標を照らし合わせ、何が対応しているか、何が不足をしているのかを検証する(表3)。

表1 R2年度 保育指導法(表現I)シラバスとモデルカリキュラム「幼児と表現B」との対応表

回数	保育指導法「表現I」授業内容	「幼児と表現B」との対応
1	幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領における領域「表現」について	(1) -1)
2	子どもの発達と音楽表現 *歌う	(1) -3)
3	子どもの発達と聴く活動及び援助方法	—
4	保育現場の見学「乳児期における音楽表現を通じた場面」*歌う	(1) -2), (1) -3)
5	保育現場の見学「幼児期における音楽表現を通じた場面」*歌う	(1) -2), (1) -3)
6	子どもの発達と歌う活動及び援助方法 *歌う	—
7	子どもの発達と奏でる活動及び援助方法 *歌う	—
8	子どもの発達と動く活動及び援助方法 *歌う	—
9	子どもの発達とつくる活動及び援助方法 *歌う	—
10	保育環境の構成と子どもの活動「指導者の立て方と模擬保育の進め方」	—
11	音楽表現を通じた保育活動の展開「0,1歳児の保育」*歌う	(2) -5)
12	音楽表現を通じた保育活動の展開「2歳児の保育」*歌う	(2) -5)
13	音楽表現を通じた保育活動の展開「3,4歳児の保育」*歌う	(2) -5)
14	音楽表現を通じた保育活動の展開「5歳児の保育」*歌う	(2) -5)
15	領域「表現」における音楽に関する保育の動向と保育創り	—

表2 モデルカリキュラムとの対応からの不足内容

授業回数	不足内容
3	・身近な環境の中から様々な出来事に会うこと ・身の回りのモノを用いた表現や声遊びなどの多様な表現
6	・歌唱の技法を深める ・学生自身の実践力・音楽教材のレパートリーを増やし、知識技術の向上を図る ・幼児の育ちや保育のねらいに合った教材やそのアレンジの仕方について学生自身が考え、学生の実践的な力に繋がる指導
7	・表現の可能性について考えること ・教材研究する機会 ・演奏の技法を深める
8	・幼児の表現に応用できる内容のリズムや言葉遊び ・表現の可能性について考えること ・教材研究する機会
9	・創作活動などを協働して表現 ・幼児の表現できる内容での創作
15	・領域「表現」のねらい及び内容、内容の取扱いの取扱いに関する総括

また、R2年度 保育指導法（表現I）シラバスとモデルカリキュラム「幼児と表現B」との対応表（表1）で、保育指導法（表現I）の授業内容に、歌うことが不可欠である内容には「*歌う」と記入し、モデルカリキュラム「幼児と表現B」に対応していないものには「—」と記入した。

モデルカリキュラムの到達目標に対応していない不足内容を、（保育教諭養成課程研究会（編）：幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラム，8，2017.）に沿って以下に挙げてみる。（表2）

- 歌に視点を置くと、歌唱することの体験、歌唱の知識技能の向上を図り、技法を深めることが必要である。
- 表現が環境との関わりや内的な感受を経て生成され、それが自分自身の表現を通しての気づきやさらなる表現の工夫を考えるとといった表現の再生するプロセスについて、幼児の表現の具体例を通して説明することが必要である。
- 学生自身が身近な環境と十分関わる中で、美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事の出会い、そこか

ら得た感動を他者と共有したり、協働して表現したりする経験を通し、その重要性を説明し、表現の可能性について考える授業内容であること。

○様々な音楽表現を鑑賞してイメージを豊かにし表現の多様性を体験できるような授業内容である。

○表現する楽しさを生み出す音楽的要因について教材研究する機会、協働して表現することを通じ、他者の表現に共感し、学び合う機会を設けることが必要である。

これから構想していく「幼児と表現」のシラバスに、科目担当の専門性も生かし、指導法で応用できる歌唱や楽器の演奏の技法を深めること、表情豊かな歌唱表現を身に付けること、声の面白さに気づき、声を用いた応答的な表現ができることなどが「歌う」視点に繋がると考える。また、幼稚園教育要領に示されているねらい及び内容に基づき、幅広く、深く専門的内容を授業内容に含めることの必要性が示唆された。

3.2.1 模擬保育演習を行った学生の実践報告書から

授業11, 12, 13, 14回目は事前に作成した指導案をもとに模擬保育を行った。指導案テーマは「歌あそびを用いた保育」と設定した。対象年齢は0～5歳児歳児とし、模擬保育では、模擬保育を行う学生、子ども役の学生、観察をする学生に分かれ、模擬保育終了後は学生それぞれが《ワークシート》に振り返りを記述した。模擬保育を行う際の指導案は、保育指導法（表現I）の授業が開講する前に学生から提出された指導案を科目担当教員が添削し、添削した指導案をもとに個人面談を行い、学生が修正し、再提出された指導案で模擬保育が行われた。

模擬保育を行った学生は模擬保育演習の動画をもとに自分の実践を振り返る《実践報告書》を提出した。

《実践報告書》から、気づいたこと、改善案を抜粋する（表4）。

今回、取り上げられた歌は「おこのパンツ」「バスごっこ」「パンダウサギコアラ」「しあわせならてをたたこう」「おもちゃのチャチャチャ」「げんこつやまのたぬきさん」「エビカニクス」「さかながはねて」「あたまかたひざぼん」「ぺたぺたおもち」「いぬのおまわりさん」「おおがたバス」など、わらべうた、手遊び、身体表現を伴う歌うことに基づいたあそびを用いている。

表3 「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラム³⁾

「幼児と表現」	
＜全体目標＞	当該科目では、領域「表現」の指導に関する、幼児の表現の姿やその発達及びそれを促す要因、幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊びや環境の構成などの専門的事項についての知識・技能、表現力を身に付ける。
(1) 幼児の感性と表現	
＜一般目標＞	幼児の表現の姿や、その発達を理解する。
＜到達目標＞	1) 幼児の遊びや生活における領域「表現」の位置付けについて説明できる。 2) 表現を生成する過程について理解している。 3) 幼児の素朴な表現を見出し、受け止め、共感することができる。
(2) 様々な表現における基礎的な内容	
＜一般目標＞	身体・造形・音楽表現などの様々な表現の基礎的な知識・技能を学ぶことを通し、幼児の表現を支えるための感性を豊かにする。
＜到達目標＞	1) 様々な表現を感じる・みる・聴く・楽しむことを通してイメージを豊かにすることができる。 2) 身の周りのものを身体の諸感覚で捉え、素材の特性を生かした表現ができる。 3) 表現することの楽しさを実感するとともに、楽しさを生み出す要因について分析することができる。 4) 協働して表現することを通し、他者の表現を受け止め共感し、より豊かな表現に繋げていくことができる。 5) 様々な表現の基礎的な知識技能を生かし、幼児の表現活動に展開させることができる。

表4 《実践報告書》から、気づいたことと改善案の抜粋

<p>3歳児対象</p> <p>①子ども達への声掛けが少ない。</p> <p>②踊る前に何度かお手本を見せるとよかった。</p> <p>③CDでの歌の曲のテンポが速すぎた。</p> <p>④歌う声小さかった。</p> <p>⑤リトミックの時に説明が不十分で何をしたらよいのか分からない子どもがいた。</p> <p>⑥ピアノの音の種類が少ない。</p> <p>⑦歌の練習の時に文字が読めない子ども、リズムがわからない子どもがいた。</p>	<p>①声掛けをもっとする。</p> <p>③CDに頼らず、保育者が子ども達の様子を見ながら歌う。</p> <p>④自信をもって大きな声で歌う。</p> <p>⑤分かりやすい説明を考える。</p> <p>⑥簡単な和音でよいから音の週類を増やす。速さ、強弱を变える。</p> <p>⑦文字を大きく書いて見せるが、まずは読むことから始める。保育者がお手本で歌い、何度も繰り返し歌うことが大事だと思う。</p>	<p>⑧活動をしない子どもの話を聞いていたら他の子どもたちがつまらなそうだった。</p> <p>4歳児対象</p> <p>①歌聲が低い。</p> <p>②一部にばかり声掛けをしている。</p> <p>③活動の展開をもっと増やす。</p> <p>④歌は2番まで(全部)歌う。</p> <p>⑤子ども達が円になった時、円の外で説明をしている。</p> <p>5歳児対象</p> <p>①子ども達は活動する歌を一部分しか理解していなかった。</p>	<p>⑧話を聞くことも必要だが、無理にやらせようとせず、活動がしたくなる保育を目指す。</p> <p>①子ども達の音域にあった声で歌う。</p> <p>②視野を広くして全体に目を配る。</p> <p>③サイレントを取り入れたりする。歌うグループ、踊るグループに分けたりする。</p> <p>④しっかり歌詞を覚える。</p> <p>⑤円の中で説明をした方が子ども達全員にわかりやすい。</p> <p>①始めに、みんなで歌を何度か歌い、歌を理解できるようにする。</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

②子ども達は歌いながらする振りをあまり分かっていなかった。	②歌に合わせてどのような振りをするのか詳しく説明をする。
③バスに乗っている気分になっていない。(バスごっここの歌)	③段ボールなどでバスを製作してバスに乗っている気分になれる環境を作る。
④活動中、いざこざが起きた時の対応に時間がかかり、周りの子が飽きていた。	④それぞれの場面で対応できるようにしっかりと、シミュレーションをしておく。

3.2.2 課題

「歌あそび」をテーマにしているにもかかわらず、歌うことに関しての気づき(下線部分)は大変少ない。学生の歌うことへの意識が希薄であることがわかる。気づきの内容は乏しく、歌う声の大きさ、歌う曲の調性、歌うテンポ、歌詞の暗記、歌詞の伝え方、リズムのとり方など、技術的なことだけに留まっている。

手遊びなど音楽表現には歌うことが不可欠であり、歌うことの基礎技能、歌うことを通した自己表現は現行の教科に関する科目「子どもの音楽」で習得しているにも関わらず、学生にとって「歌う」視点の希薄さが窺えたことが重要な課題となる。

「コダーイメソッド」で知られるハンガリーの作曲家、音楽民俗学者、音楽教育学者であるコダーイは「音楽に向かって子どもを育てることの音楽の第一歩は歌である」と述べている。「歌うという行為は自らの身体が音源となり、自分の声そのものが楽器となる」⁵⁾

「正しい音程やリズム、明瞭な発音を心掛けて歌うこと、歌の歌詞は覚えて歌うこと、表現者としての幼稚園教諭の感性や表現力、演技力、創造性を発揮しなければならない」⁵⁾から、「歌う」という重要な視点が窺える。

幼稚園教育要領の感性と表現に関する領域「表現」の内容(6)「教師などの大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、幼児が音楽に親しむようになる上で、重要な経験である」²⁾から、学生自身が歌うことを通した表現する音楽的要因について考え、学び、実践していける指導が急務である。

4. まとめ

領域「表現」は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「豊かな感性と表現」に関係する内容である。

その内容は「心を動かす出来事などに触れ感性を働

かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」⁴⁾と記されている。

幼稚園教諭を目指す学生は、幼児の表現の発達を理解するとともに、学生自身がこの「豊かな感性と表現」の内容を実際に体験することを通して、領域「幼児と表現」に関する専門的事項を修得して欲しい⁴⁾。それには、今回、明らかとなったモデルカリキュラムとの対応の不足部分を、これから構想していく「幼児と表現」の授業内容に反映し、「保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」に関する科目と「領域に関する専門的事項」に関する科目との一貫性、また、他領域間での連携も必要であると考えられる。

学生を取り巻く様々な表現活動においても、今回着目した「歌う」という視点が、学生にとって常に意識できる授業内容として構想していきたい。

5. 引用文献

- 1) 無藤隆・汐見稔幸編：イラストで読む！幼稚園教育要領 保育所指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領はやわかりBOOK, 学陽書房, pp36-39, 2017.
- 2) 文部科学省：幼稚園教育要領解説.
- 3) 文部科学省：幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究報告書 平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える— 3.領域及び保育内容の指導法に関する科目 (1.科目構成の考え方) (2.「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラム).
- https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm (2020年11月28日閲覧)
- 4) 保育教諭養成課程研究会(編)：幼稚園教諭養成課程をどう構成するか〜モデルカリキュラム, 8, 2017.
- 5) 村上玲子・櫻井琴音・上谷裕子編著：アクティブラーニングを取り入れた子どもの発達と音楽表現, 学文社, pp55-67, 2015.